

令和2年度Sport in Life推進プロジェクト
(ターゲット横断的なスポーツ実施者の増加方策事業)

「ヴォルティス元気っずプログラム」

～遊びと栄養を通して子ども達にもっと笑顔を～

「徳島ヴォルティス株式会社」

2021年2月12日



・ヴォルティス元気っずプログラム～遊びと栄養を通して子ども達にもっと笑顔を～

事業概要

市内3箇所の認定こども園5歳児（102人）を対象に、Jリーグサッカーチーム、プロのコーチによる運動プログラムを実施する。プログラムは、遊びの中から基本的な運動を身につけさせるもので、月2回の集団指導と自宅において保護者との遊び（運動）を3ヶ月間実施する。事業実施前後のアンケート調査により検証し、検証結果を用いて次年度以降の事業実施を検討する。また、運動プログラムと同時に栄養指導を実施し、健康的な身体づくりについての意識を高める。

実証フィールド

美馬市内（認定こども園3園）

代表団体

徳島ヴォルティス株式会社

構成団体

美馬市、大塚製薬株式会社

ターゲット

<未就学児及びファミリー層>
 ◇美馬市内の認定こども園（3園）の園児 5歳児 102名
 ・江原認定こども園 40名
 ・美馬認定こども園 37名
 ・穴吹認定こども園 25名

プロジェクト 実施内容

- ① 1回あたりのプログラム実施時間：45分／指導者となるコーチの人数：3名
- ② 集団指導（月2回、3ヶ月間）は、日本スポーツ協会の「アクティブチャイルドプログラム」を中心にボール遊びも入れる。
- ③ プログラム実施に伴い、消費カロリーの増加が見込めるため、それを補うためのバランスの良い栄養補助食品と、熱中症予防のためのイオン飲料を配布する。
- ④ 自宅でのプログラムについては、園児が保護者と取り組むワークブックを作成し配布。
 自宅用に保護者と一緒に取り組めるようコーチの動画撮影を行い、QRコードを作成し、配布。



効果検証の概要

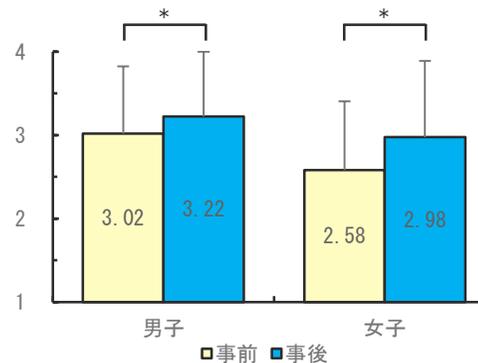
ターゲット	調査項目	現状	実績	効果検証方法
子ども	遊びの種類（活動量）	2.83	3.12	保育者（クラス担任）を対象とする、事前・事後のアンケート調査結果から比較分析
	よく遊ぶ友だちの人数	2.22	2.82	
	社交性が高い	2.46	2.67	
	ルールを守れる	2.99	3.22	

効果検証の結果

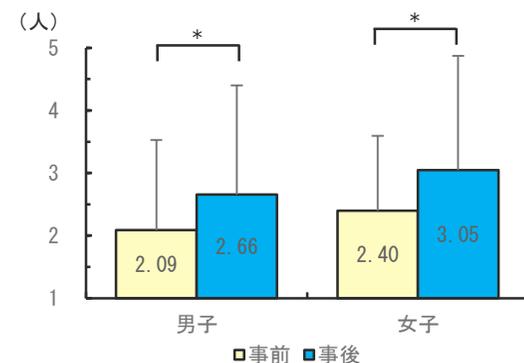
遊びの内容に関する調査

- プログラム実施前後で比較すると、遊びの種類（活動量）に関する設問について、1.静的～4.動的と4段階でグレーディングして数値化したところ、男子では3.02から3.22、女子では2.58から2.98へいずれも増加した（ $p < 0.01$ ）。
- よく遊ぶ友だちの人数について、男子は2.09人から2.66人、女子は2.40人から3.05人となっており、男女ともプログラム実施後に、より**協同的・組織的な遊びを好む傾向**が見られた（ $p < 0.01$ ）。

遊びの種類（活動量）



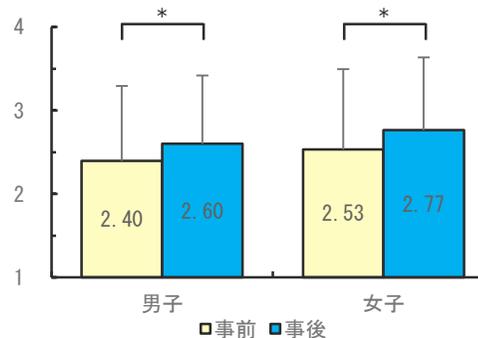
よく遊ぶ友だちの人数



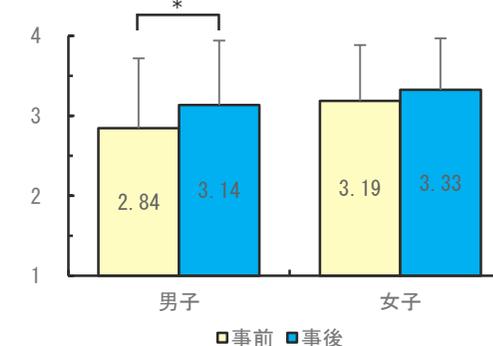
社会性に関する調査

- プログラム実施前と実施後を比較すると、社交性に関する設問について、1.社交性が低い～4.高いと4段階でグレーディングして数値化したところ、**男子では2.40から2.60、女子では2.53から2.77へいずれも増加した**（ $p > 0.01$ ）。
- 決まりやルールに関して、1.守れない～4.守れるについて数値化したところ、男子において2.84から3.14へ増加した（ $p < 0.01$ ）。

社交性



ルール



効果検証の概要

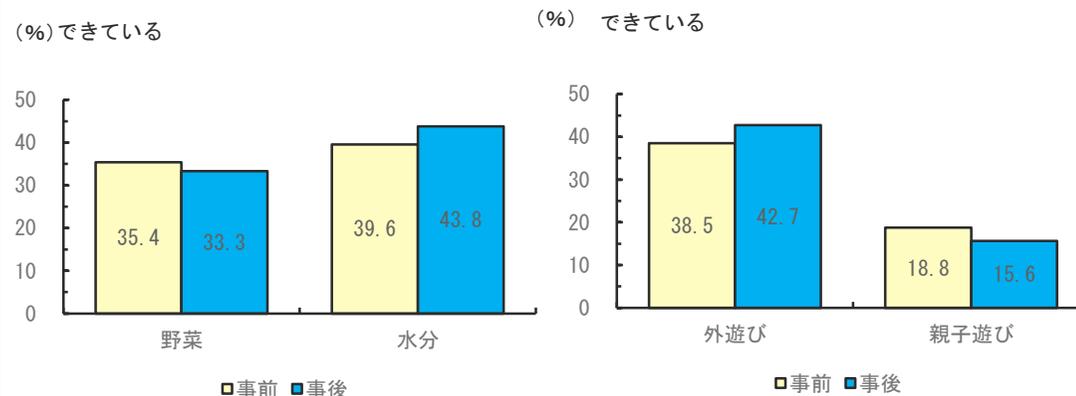
ターゲット	調査項目	現状	実績	効果検証方法
子ども	外でよく遊ぶ	38.5	42.7	保護者を対象とする、事前・事後のアンケート調査 結果から比較分析
	お子様と一緒に遊んでいる	18.8	15.6	
	野菜を食われている	35.4	33.3	
	水分が十分に摂れている	39.6	43.8	

※今後の継続事業としてのベースを構築することが目的なので今後は、この結果を踏まえてKPIを設定していく

効果検証の結果

家庭での遊び・食習慣

- 家庭での外遊びは、若干増加傾向がみられた。
- 一方、親子での遊びは変化がなく、**本プログラムで提供したワークブックや動画があまり活用されなかった可能性がある。**
- 自宅での食習慣について、プログラム実施前後で比較すると、「（子どもが）野菜を食われている」について「できている」と回答した割合は、プログラム実施前後で変化が見られなかった。
- 「水分が十分に摂れている」について「できている」と回答した割合は、プログラム実施前後で変化が見られなかった。



スポーツ実施の阻害要因、促進要因（仮説）

ターゲット	効果スポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）
子供	<ul style="list-style-type: none"> ・少子化や核家族化の進行により、兄弟姉妹や地域での集団遊びが少なくなっている ・運動できる公園、場所が少ない ・専門的指導をできる人が少ない ・家庭での運動をさせる機会が少なく、テレビ、ゲーム等、体を動かさない遊びが増えている ・嫌いな運動はやらない

スポーツ実施の阻害要因、促進要因に関する分析

	スポーツ実施の阻害要因（事業実施前の仮説）	スポーツ実施の促進要因（検証結果）
子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・少子化や核家族化の進行により、兄弟姉妹や地域での集団遊びが少なくなっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・よく遊ぶ友達の人数が実施後に増えている傾向（平均約0.6人増加）や、社交性が高まっている結果（約0.2ポイント上昇）を踏まえると、友達との協同的・組織的な遊びを好むようになってきていると言える。
	<ul style="list-style-type: none"> ・運動できる公園、場所が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の検証では、家庭に帰ってから、親子で体を動かす機会の増加にはつながらなかった。保育園での集団プログラムだけでなく、家庭でもできる運動（少人数、小スペース）を促進させる動画内容、ワークブック内容の工夫などが必要である。
	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的指導をできる人が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のプロスポーツ団体（徳島ヴォルティス）のスタッフが指導にあたったことにより、専門的な運動の指導がなされるとともに、ワークブックや動画によるフォローアップがなされた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭での運動をさせる機会が少なく、テレビ、ゲーム等、体を動かさない遊びが増えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の検証では、家庭に帰ってから、親子で体を動かす機会の増加にはつながらなかった。園庭で先生や保護者と一緒になって遊ぶことの楽しさを覚え、家庭でも保護者と一緒に遊びの楽しさを体感できるよう工夫をすることが必要である。
	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌いな運動はやらない 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ではやらないが、先生はじめ、保護者や園児と集団でやっていると、最初は嫌がっている園児も、徐々に楽しく体を動かすようになったことから、運動に対する心理的障壁を低くすることができた。

- ・ヴォルティス元気っずプログラム～遊びと栄養を通して子ども達にもっと笑顔を～

事業継続や 横展開に向けた ポイント、課題

<アンケート結果から>

- ・保育者の目から見ると、園での子どもの様子はポジティブに変化している。
- ・保護者から見ると、家庭では「遊び」「生活習慣」は数値として大きな変化はない。
- ・保護者の感想からは「遊び」そのものについてはポジティブな声が聞こえるため、継続実施して家庭での変容も導き出したい。
- ・食生活については「数値」、保護者の事後アンケートともに変容はない。

<今後の改善方策>

- ・自宅プログラム（ワークブックや遊びの動画）の活用状況（親子による利用頻度など）が把握できれば、さらに分析的な作業が実施可能と思われる。**自宅プログラムを充実させる、あるいは、こども園での取り組みを自宅へ持ち帰らせることなどが、今後の課題**になると考えられる。
- ・食生活については、保護者の理解を深めるために、事前の保護者との勉強会などが必要（先生も含む）。
- ・今回のような事業については、社会的課題を解決したい行政、プレーヤーとしてのプロスポーツ団体、そして健康・栄養情報を保有する民間事業者がそれぞれ役割を認識し、課題に向けて取り組むことが重要であると感じた。

次年度以降の 事業継続、 横展開の計画

令和3年度については、美馬市が予算化を行い委託事業として事業継続する予定となっている。また、本年度については、事業対象は3園であったが、次年度については7園（幼稚園3、認定こども園4園）に対象を拡大し、本事業を行う予定である。なお、契約の形態としてはPFS（成果連動型委託）を採用する予定である。
（KPIや委託費用については現在協議中である）

今後の事業展開に 向けて期待される sport in Life プロジェクト における取組

官民一体となる協働事業として推進していくためには、民間事業者及び行政とのマッチングの場の提供や斡旋などが必要ではないかを感じる。